

日常に潜む戦争 ―不安と恐怖の中で―

私たちの宗門は、かつて侵略戦争を「聖戦」と呼び、仏法の名のもとに多くの人々を戦場へと送り出しました。戦争で命奪われたすべての人々、遺族のみならず、アジア諸国、とりわけ中国、朝鮮半島の人々に、計り知れない苦痛と悲しみを強いてきました。戦争の歴史が明らかにされる中で、私たちは被害者であると同時に、加害者としての歴史も問われてきたのです。だからこそ、なぜ戦争が起きるのか、社会はなぜ戦争に向かったのかということ、全戦没者の悲しみの歴史に学び、戦争をくり返してきた人間の過ちを見つめ、未来に伝えていくことを大切にしています。

この法会において、私たちは、戦争で命奪われたすべての人々の願いに耳を澄まし、日常に潜む戦争の影を見つめ、戦争の無残さ、それを生み出す人間の深い闇を、心に刻みたいと思います。そのことにより、「国豊民安 兵戈無用（国豊かに民安し。兵戈用いることなし。）」（『仏説無量寿経』）という、仏の大悲によって真実の豊かさと安らぎが与えられるところに、兵士も武器も必要がないという教えが、具体的な現実の課題をとおして知らされます。

いま世界は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に震撼しています。国内においても感染終息の目途が立たず、命を守るために感染を防ぐ努力は大切です。しかしながら、看過してはならないのは、感染することにより世間から冷たい眼を向けられるのではないかと恐れる私たちの心や世間の風潮です。その恐れやメディアの報道などによって、私たちの心は追いつめられ、増大した不安から大衆の動向に身をゆだねることで、かりそめの安心を得ているのではないのでしょうか。

国家による戦争と、ウイルスという公衆衛生の問題は、本来、質が異なります。しかし、不安の高まりからくる過剰な同調圧力は、戦時下と似通ったものを感じずにはいられません。私たちは、不安から逃れるために、その場の空気や力関係に従うことで自分の身を守ろうとします。そのような意識が、家族のため、みんなのため、やがては国のためにと、「自発的に」命令に従い、「正義」の名のもとに凄惨な戦争へと向かっていったのです。

私たちは、厳しい状況の中で、戸惑い揺れ動く心や、追いつめられて呻きをあげる一人ひとりの小さな悲しみこそ大切にしていきたいと思います。それにより、「一切恐懼 爲作大安（一切の恐懼に、ために大安を作さん。）」（『仏説無量寿経』）という仏の願いに答えてまいります。

このたびの法会が、非戦・平和への歩みを共につなぐ場となることを心より願います。